知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 ［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

JULY 2019 7

野間の旅、いまむかし

～街道看板紀行 其の四

野間の旅、いまむかし

街道看板紀行 | 其の四

元号をまたいでお送りしている「知多半島南部の観光」シリーズ、
今回は古くから観光地として知られた野間を訪ねる。
歴史、海、食と話題豊富な観光の町がどのように成り立ち、
今どのような取り組みをしているのか、
じっくり歩き、味わいながら探ってみた。

歴史と海に誘われて

旅行気分で国道247号を南下すると、美浜町に入ったあたりでにわかに雰囲気が変化することに気が付く。常滑市内は田園風景の中にもまだどことなく名古屋都市圏の空気が漂っているように感じられるのだが、市町境を越えると、いよいよ観光エリアに突入したことを実感するのだ。

それは、海の近さが感じられるのびやかな風景もさることながら、国道沿いに立つ看板の効果も大きい。というのも、常滑市域までは地域住民向けの宣伝看板が多いのだが、美浜町に入ると観光客向けの看板が突如目立ち始めるのである。えびせんべいの里、南知多ビーチランド、杉本美術館、旅館、美浜町の歓迎看板などなど。地元の人には見慣れすぎて気にも留まらないかもしれないが、旅行者にとってはこういうアイテムが案外旅気分を盛り上げてくれる。

上野間、奥田と進み、野間の町の中ほどまで来ると、ひときわ目を引く看板に二つ続けて遭遇する。それは、道路を跨いで設置されたアーチ型看板だ。北側のアーチには「野間大坊」、南側のアーチには「野間海水浴場」と大きく記されており、どちらにも野間地区の旅館、飲食店、病院などが併記されている。これは美浜町商工会が設置したもので、昭和チックな風情がどこか懐かしさを呼び起こす。昔は商店街や観光地などでこのようなアーチはごく当たり前に見ることができたが、今ではかなり貴重な存在になっており、知多半島ではこの二基がほぼ最後の生き残りである。

* * *

これまで本誌でもたびたび紹介してきたが、知多半島南部の観光は、内海の内田佐七が内海自動車（知多バスの前身）を設立し、大正時代から昭和初期にかけて積極的な宣伝や開発を行ってきたことに端を発する。知多観光の黎明期に大きくクローズアップされたのは篠島、内海、野間で、これらがいわば「三大名所」だった。もし本誌2016年11月号（南知多パノラマ大遊覧紀行）をお持ちであれば、この三大名所を実面積以上に大きく描いた鳥瞰図を掲載しているのでご覧いただきたい。

野間の観光と言えば、国道247号のアーチ型看板が示すように野間大坊と海に尽きる。昭和十年代に南知多観光協会が制作した観光パンフレットに、観光客の興味を否応なく掻き立てる野間の案内文が掲載されているので、少し長いが引用しよう。

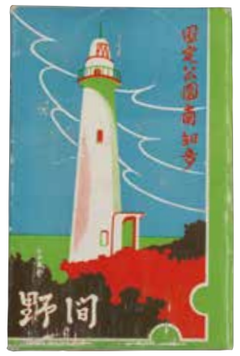
日本一の学校臨海聚楽地として有名な海水浴場であり、大、中、小、女各種学校の海浜聚楽を営む者毎年数十校。殊にシークでウルトラモダンな女学生の紅紫白、色とりどりの海水着に包む処女群像の溌溂さ美麗さは眼を眩むばかりです。（中略）

更に又、平治の昔、源氏の総帥義朝公が家臣長田忠致の殺逆に薨去され、村内に多数の史跡が残って居ます。就中、古刹大御堂寺（野間の大坊）に残る公の墳墓には、幾百万本の木太刀が捧げられ「無念なり我に木太刀なりともあらば」の悲哀慟哭の声が愁々として史蹟に満ち、諸国から遥々参拝の人々が夥しい数に上ります。

各史蹟に関わる伝説や史実を探り、或いは名勝野間灯台の絶景を賞で乍ら、薄暮の逍遥は詩そのものです。是非一度、詩の海の真価をお味わいください。

（「夏は涼しく冬暖かな南知多」より。句読点と改行を適宜追加し、現代仮名遣いに改めた）

ドラマチックな歴史を秘めた史跡と、欽声が響く美しい海は、当時から多くの人を野間に引き寄せていたのである。そして、時代の流れとともに観光客の増減や施設の消長はあるものの、現在もなお知多半島の代表的観光地であることに変わりはない。



門前町には弘法宿がある

観光地・野間の特徴のひとつは、旅館街であることだ。美浜町から南知多町にかけての海岸沿いや島には数多くの宿泊施設があり、観光が地域の主力産業になっている地域ならではだが、野間もその一翼を担っている。

現在、野間旅館組合に加盟する宿泊施設は十一軒。大雑把に分けると次の四か所に分布する。野間大坊門前に三軒、野間海水浴場付近に三軒、小野浦に三軒、そして若松・奥田に二軒という具合だ。これらのほかに組合未加盟の宿泊施設も数軒ある。下呂など有名温泉地のように狭い範囲に宿が密集しているわけではないが、点在する宿泊施設がこの地域に独特の風情を生み出していることは間違いない。

野間の旅館のルーツのひとつは「弘法宿」にあると考えられる。弘法宿というのは、知多四国霊場の札所寺院の門前に開かれた巡拝者向けの宿屋のこと。巡拝者の多い時期に民家が寝床として座敷を提供したのが始まりで、当初は民宿をさらに簡素にしたようなものだったという。戦前には大半の札所寺院の門前に弘法宿があり、戦後も自動車巡拝が盛んになるまでは生き残っていた。もちろん今となってはそうした純粋な弘法宿は存在しない。

野間大坊門前の三軒は、もともとは弘法宿からスタートした旅館だ。柏屋は明治時代の早い時期、紅葉屋旅館は大正元年（一九一二）、やまに旅館は大正十四年（一九二五）の創業と、いずれも長い歴史を誇る。時代とともに施設もサービスも「グレードアップ」したが、緑に包まれた風情ある大寺院の門前という立地に変わりはなく、懐かしくアットホームな雰囲気が好まれてか、今も巡拝者によく利用されているようだ。それは門前だけでなく野間全域の旅館も同様で、講（知多四国の巡拝グループ）の中には七十年も前から代々同じ旅館を使っているところもあるとか。ただ、以前よりも団体巡拝はかなり減少し、数人規模のグループや家族、夫婦連れの巡拝者が大半という。

若者よ、野間の海に来たれ！

一方で、海水浴客の受け入れという歴史から始まった旅館もある。先述のパンフレットに「日本一の学校臨海聚楽地として有名」という一節があったように、古くは家族向けというよりは学生客に特化したような海水浴場だった。昭和三十年刊行の『野間町史』によると、明治四十一年（一九〇八）、創設されたばかりの旧制第八高等学校（名古屋大学の前身）の学生たちが野間に来たのが始まりで、翌年以降は他校の生徒も訪れるようになり、学生向け海水浴場として知られるようになったという。

先述のパンフレットには、戦前の旅館の様子が分かる一文もある。

半島第一の劇的色彩豊かなる史蹟地として

探訪来賽するものが多い（大正十四年発行『交通名所図絵 南知多遊覧』より）

8枚組絵はがき「国定公園南知多 野間」より（美浜町教育委員会所蔵）

物価の素的に安い素朴であり、真実の意味での健康地である事は、上記の学校指定地である事実が何より雄弁に物語っており、殊に貧間に依り家族水入らずの自炊生活で長期に亘っての滞在がごく安価に出来るのが此の地の特色であります。

（夏は涼しく冬暖かな南知多」より。現代仮名遣いに改めたほかは原文ママ）

貸間というのは自炊ができる素泊まり宿のこと。長期滞在して療養するような温泉地で現在も見られる形態だ。リーズナブルで自由な点が、学生や庶民の人気を呼んだのであろう。中でも大坊門前の柏屋は、その最初期から学生を受け入れていたという。

海辺の旅館の創始は次のとおりだ。野間海水浴場が目の前にあるいろはや旅館は明治二十二年（一八八九）頃の創業。古くはやや内陸に宿があり、芸者などを置いていた料亭旅館が始まりだったと伝わる。大正時代に創業した海浜館は芸者置屋として始まり、のちに海水浴客を中心とした旅館に業態を変更。両館のルーツは、野間がかつて廻船業で繁栄したことを思い起こさせる。同じく大正時代に開業した小野浦館は、当初は経営がうまくいかず、名古屋で料亭を営んでいた現宿主の曽祖父が譲り受けて再スタートしたという歴史を持つ。学生・家族向けというだけでなく、名古屋方面の財界人が避暑に利用したようだ。

他の宿の歴史も見てみよう。若松海水浴場に近い新栄館は昭和四十四年（一九六九）に海の家としてスタートした、純然たる「海水浴系」の旅館だ。ちなみに野間旅館組合自体も、昭和四十年代に海の家を運営するために組織された団体という。閑静な小野浦の高台にある望水荘は昭和四十七年（一九七二）、先代が「心と身体を癒せる宿を作りたい」との思いから創業した。扉写真のアーチのすぐそばにある魚正は、館名が示すとおり鮮魚店から始まっている。宿主が豊浜漁港の仲買人という利点を活かして、地魚を値打ちの価格で味わえることを目玉に食事処、旅館へと発展した。

南知多ビーチランドの南にあるかんぽの宿知多美浜は、昭和五十二年（一九七七）に郵便局の簡易保険加入者向けの宿泊施設として開業。郵政民営化以後は誰でも泊まれるようになっている。

面白い歴史を持つのが、野間灯台の少し北にあるホテル小野浦だ。創業は昭和三十九年（一九六四）なのだが、当初はなんとドライブインだった。当時はマイカーブームの真っ只中で、自家用車で知多半島へ遊びに来る人が急増していた頃。全国の幹線道路や観光道路沿いには続々とドライブインが登場しており、時代の寵児ともいうべき施設だった。現在の業態になったのは昭和六十年（一九八五）で、自家泉源の天然温泉「海炎温泉」も湧出している。

このように、一口に野間の旅館と言ってもその起源はそれぞれで、それだけでもこの土地の歴史の深さと多様な地域特性が見て取れる。

野間ならではの美味に舌鼓

そんな野間の旅館はどのような現況なのだろうか。知多半島に住んでいると宴会・法事・会合などで利用しても宿泊の機会は滅多にないので、意外と知らない読者も多いのではないだろうか。

どの宿も春は知多四国めぐり、夏は海でのレジャー客が多いのは昔から変わらない。海水浴客は全国的に減少傾向というが、それだけでなく磯遊び、海釣り、サーフィン、SUP（スタンドアップパドル）などアクティビティが色々楽しめるのは知多半島の特徴。とはいえ昭和のように人でごった返す時代ではないし、どの季節でも美しい伊勢湾の風光を静かに楽しみたいという旅馴れた観光客には、穴場的な雰囲気がありアクセスも便利な野間の評判はかなりいいという。

昔ながらの臨海学校はさすがにもう行われていないが、いくつかの宿は今も学生の利用が多いと口を揃える。ゼミ合宿やサークルの旅行、そしてすぐ近くにある日本福祉大学の学生たちが歓迎コンパや送別会などに利用するというのだ。大人数を受け入れられる設備と学生対象の価格設定ゆえで、そこは「日本一の学校臨海聚楽地」という歴史が今も受け継がれていると言えよう。

今の野間の旅館で、そうした良環境と並んで人気を呼んでいるのは、なんといっても料理だろう。海の幸、大地の恵みが枚挙に暇のないことは今更言うまでもないが、それぞれの旅館や組合での取り組みによって、多くの観光客が野間の食事を高く評価しているのだ。

目玉のひとつはふぐである。このあたりはふぐの好漁場で、ふぐ料理が知多半島南部の名物であるのはすでに広く知られたところ。日間賀島とともにその先駆けとなったのが野間である。口火を切ったのは柏屋で、平成七年（一九九五）頃からふぐ料理を積極的に打ち出すようになった。ふぐは地元の守り神である冨具（ふぐ）神社と同じ音であり、また「福」とも結び付くことから、野間の目玉として押し出す機運が高まっていった。冨具神社の下にはこのような看板も立っている。

もうひとつ、近年始められた創作メニュー

そよ風の真砂に寝ねて帆を数へ

夏はよきもの身の幸思ふ（昭和三十年刊行『野間町史』より）

冨具崎展望台から望む野間の町並み

ゆったり流れる時間ともてなしの心が、旅人たちを癒し続けてきた

「源義朝御膳」も話題である。平成二十四年（二〇一二）にNHK大河ドラマ「平清盛」が放映されたとき、源義朝が清盛のライバルとして克明に描かれた。そのとき「義朝の史跡を訪ねる人たちに、ゆかりの地を感じさせる食事を楽しんでもらいたい」と、野間旅館組合が新メニュー開発を企画。持ち寄ったアイデアの中から、やまに旅館が考案した鍋料理をもとに練り上げた。現在はやまに旅館、紅葉屋、いろはや旅館、魚正、望水荘の五館が提供している。

この御膳には統一の決まりごとが三つある。ひとつは、京から逃げてきた義朝一行が上陸して最初に口にした食事にヒントを得た「つきかけの餅（おこわ）」。もうひとつは、源氏が白、平家が赤の旗印にちなみ、温めると白い汁が赤く変わる「源平鍋」。そして、討たれた義朝が最期に呟いた「せめて木太刀の一本でもあれば…」のセリフで知られる木太刀を添えること。木太刀は、野間大坊の境内にある義朝の墓に供えられるものと同じ。願い事を記して奉納すれば大坊で「お焚き上げ」をしてくれるそうで、味とビジュアルだけでなく「アフターサービス」も備えているのがこの御膳の特徴だ。

それにしても気になるのは、白から赤に変わる源平鍋だ。汁の味や具材は宿によって異なるというが、今回はいろはや旅館で提供されるものを試食させてもらった。イタリアンのシェフでもある当主のアイデアが盛り込まれ、源平鍋でもとりわけ個性的な洋風テイストだ。

使う鉄鍋は宿泊施設や和食店で定番の一人用。その中は牛乳ベースの白いスープで満たされている。火をかけて程なくすると、鍋の底からぽつぽつと赤い泡が浮かび上がってくる。スープが煮立ち、泡の勢いが増すにつれてスープが徐々に赤く染まってゆき、火が収まる頃には完全に赤色に変わっていた。実にインパクトがある。赤の正体は、トマトベースのソースをゼラチンで固めたもの。白いスープの底に沈めておくと、熱でそれが溶け出す仕組みだとか。トマトの酸味と甘みがバランスよく調和するこのスープに、豚肉や鯛しゃぶが実によく合う。

野間で味わえる食材はふぐだけではない。本誌前号で紹介した海音貝や、最近脚光を浴びている美浜町産のブランド肉「恋美豚」といった新しい特産品も、各旅館で積極的に使用している。また、旅館の女将さんたちで組織している「女将会」では、数年前から共同できゃら蕗と金山寺味噌を手作りしており、こちらはおみやげとしても好評だ。ちなみにきゃら蕗の材料は、宮司の協力のもと冨具神社周辺で女将会が収穫した石蕗。冨具神社の御神酒で煮ているというから、こちらも御利益がありそうだ。

野間の旅は次号も続く。

参考文献◎野間町史（野間町発行・美浜ふるさと研究会復刻）／美浜町誌 本文編　取材協力◎野間旅館組合／鶴林山野間大坊／美浜町観光協会／美浜町教育委員会